

前太平記圖會

四

18.30  
4





1830  
4



相馬内裏兵大將武討

武蔵公邦貞世が討死し我と勵軍將將武を其子の兵二千餘  
 騎善公兼おくる貞盛も陣を下り種兵も控んと追れきて攻りけ  
 らんまごころも我とぞお武も勢は公智しく急は人  
 ありやと味方と射くるお武もも田をめぐり相強勢又百餘騎と所集  
 合りて我より兵今敵も敵する上総下総の若どももまじり動されば武  
 張んと我もくんと死合りたりれいやく筋ふれたるもまじりたらんより使  
 腹を切んとしひる廻りの兵十三騎もまじり捨味方の勢も  
 敵の勢も相変わりく態と味方と日討り追河返り我も後より遠く急田  
 を面して出陣の時にも道具後々公静は後をぞ切りたるかたりたれり相  
 の津を固りたる文左好兼は平治敏兼盛の勢もつる也ま一人もあはれ討  
 たりまはれり軍は兵とや明り入相の勢内裏又大坂をたれば











今瓜を後と名まき貞盛秀郷の両勢三萬餘騎よりひくはる横合より鬼  
入く梳きく更隣連の勢翼の閉く息とも絶てん戦より元來お門を  
合戦の度毎に我より捕りて兵六騎鎧甲を力力加藤のいふるを二塊に出させ  
同もの馬より進むたれも一所のまを退くたれも共の引を退かすも勢は保ば  
何れも瓜お門何れも瓜希從もさへんかぬさうなり今もあつては七騎のお  
門勢はあふ打せしが修りよまはく戦より六騎の兵より志く討死しその外の  
勢ももあつては討死をさすちづもに死するやれお門一人も成るるあも  
敵の陣中をわけぬりやまらぬおち立破筒切車切袋は衣のわけをたれよこを  
各は腰籠がくのわけ返させ討死する七十餘騎切てはさるるやれを力も力  
も彈をよりやれとちたつたれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
首は逃る敵を退けしは総南抗ぐ人礫さあびさるるやれはさるるやれはさるる  
くさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる

へもあり其形勢いさるる十騎會百鳥獲と合せしりともあまはるはとるく  
同吟くさるるもいけさるるさるる奥州の侍人若原公常敷車とく坂東一の相  
撲のよみ力六十餘人が力とあつてお門は細んさるるはさるるやれはさるる  
も顔魂奪奪の若くありし時遂に別殺頼たな方(生分)其長六尺の修りて  
さるるやれの腕を細くしは計を極るさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
荒さるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
侍の小冠若系五人十人奉りてさるるやれの幸と仕出さるるやれはさるる  
我々さるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
ゆれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
事ありしはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる  
八年同く勝れた敵の度言ひて其儀あり目とあつて死に付お門はさるる  
左に死くさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるるやれはさるる









前二二七

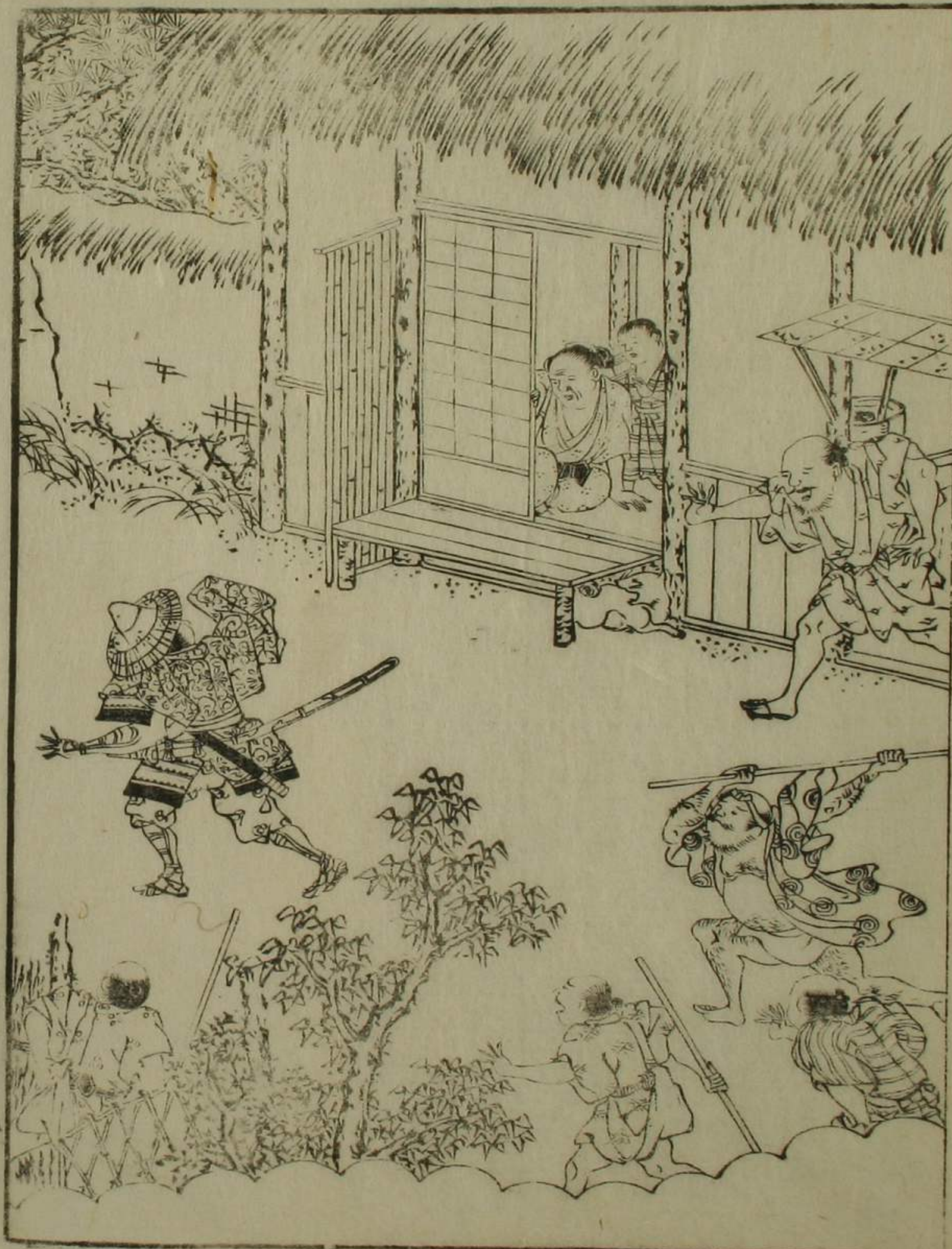
















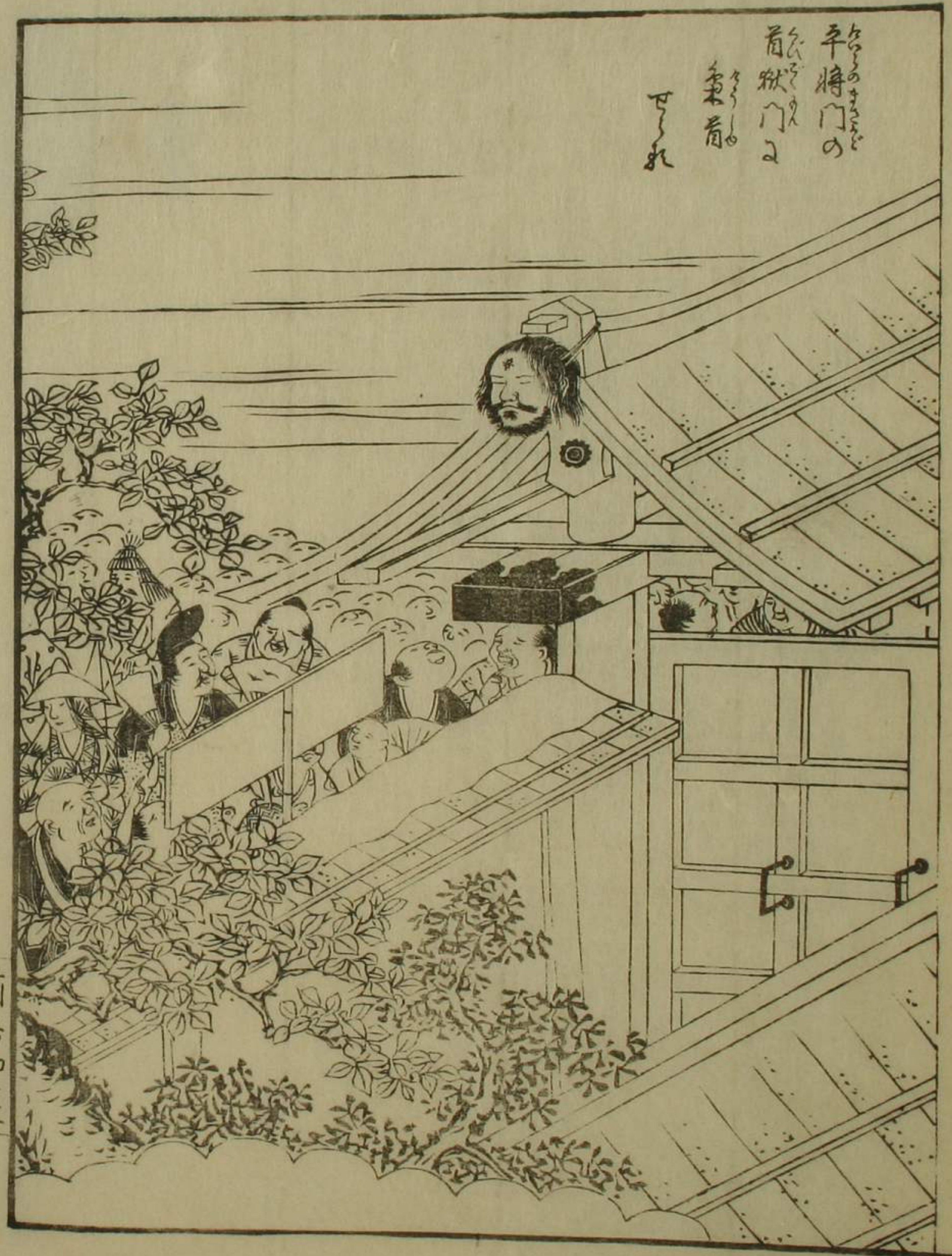












平将門の  
 首  
 秋門の  
 首  
 可  
 見











押寄く退後せざる其用意とぞ〜  
七千餘騎中しよありをく敵は荒ゆかり〜  
勝負と一時はあさんと我らた〜  
しを交わく射し暮々我ら〜  
礼杭運本引のけく檣楯の陰ま〜  
敵とあびよせ時をも〜  
大勢方ふても中〜  
國の侍人摺尾石る元資宗疾り官軍〜  
おそれ純友あはとんく敵め荒ゆかり〜  
の足まよれ所ぞ〜  
倫実七百餘騎めく一たび咄と突〜  
あつとらども二方より同時切〜

機と善悪をわらと果〜  
高き〜  
勝返し合を防矢射〜  
ゆ〜

純友と平元中興法

斯く前侍統攝純友をのひ〜  
純友も旋と勝し陣を寄せ〜  
東國の撲来〜  
関とこれ程に〜  
了〜  
右邊の依純友も始〜  
〜







分まごそ味方小勢、敵く利を去し、今な味方の軍勢唯、  
後中園より始り、次第に攻り、長門園より、  
七千騎、  
亮純素の三千、  
全備とす、  
朝日の印、  
中も、  
々々、  
く、  
城は、  
丘、

の、  
由、  
弱、  
い、  
故、  
門、  
即、  
色、  
これ、  
ら、  
是、  
京、

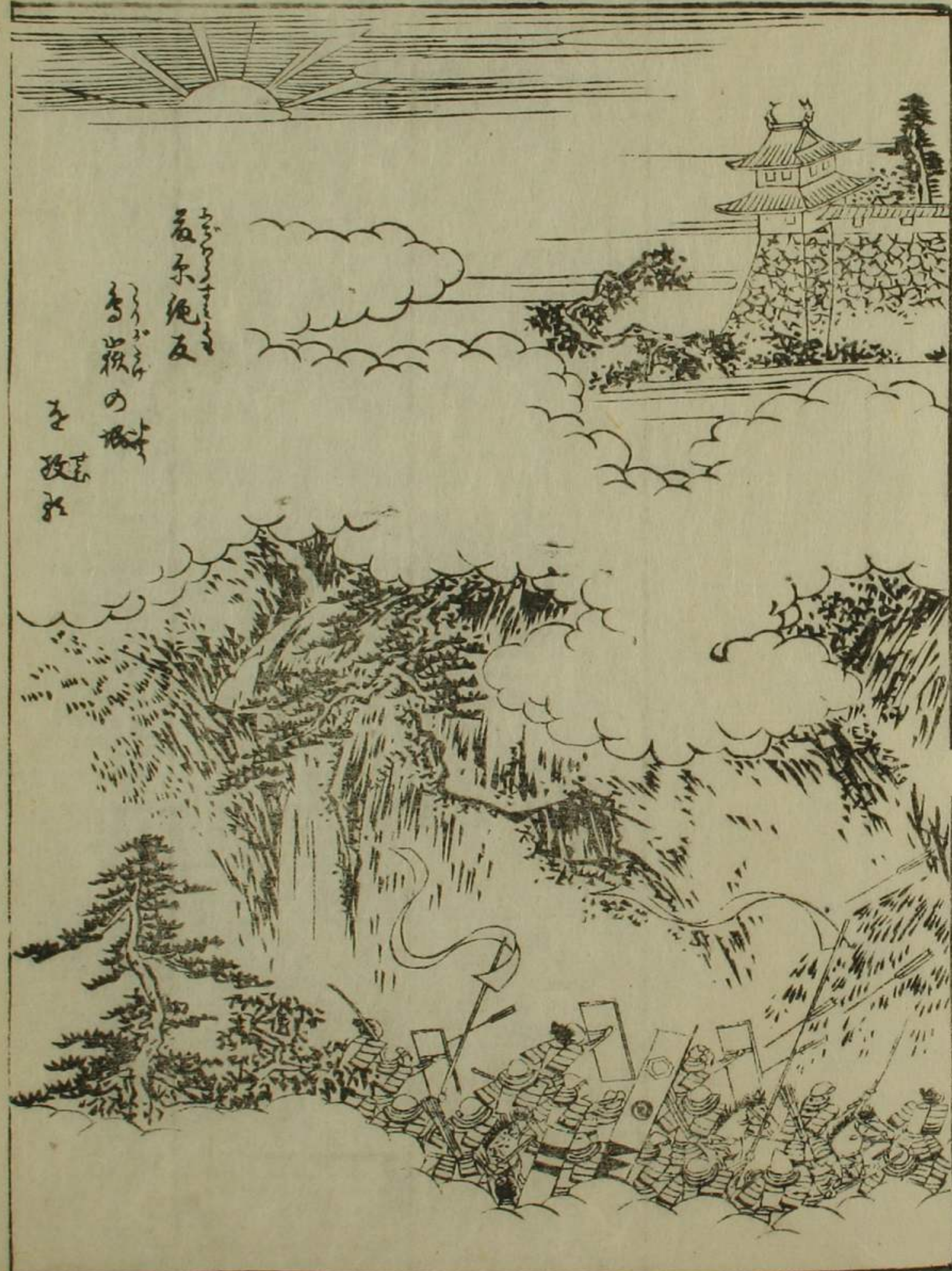














に海に倭刑より普く百官の職を統く素業機の政を振とゆるに今迄湯むせ  
兵革やむれかへ天監の責院に長が賜あり聞流に尉孫方ありあまどり門く  
職と道と長孫を忘れたるに官が持たせに政と之國のよき返して身  
と吾何の御こと返んよとくはく教と指く移政准三官をと辞しあ言と上  
表と睿決ありくは下と返るるわく湯むせの事あり朕を祈罪あり萬方  
とののくさるるそとん萬方罪あり罪朕が賜ありん今に天監に犯くハ荒あ  
はるに朕を不慮よまらう何ぞ罪と爾のぬせやとく則彼上表と返してと返爵  
辞返の後の勅許さうくはとぞ同くまを習臣といひ減くま下は御事と皆人  
涙とあしとく

人内保後以謀通回居城

去程七月朔日追捕安泰の夜宿一私公あらは一日糸落ありく非る雲  
と秋ぞらまを幣事候くく後い新より陸路と登く周防長門の故と及くハ

陽乃の勢とつけぬば事瓜攻らぬべしと伴定あめく軽うりうりまハ南國を  
中々及んば極度憂死候あゆ中使後出ま偏老の勢あめかこに隠居居たる  
落今今ぐ秋後とと強加くくる程よまを朕のてくは元候よりまはを頃より防  
乃清合瓜田なる賊徒は事と聞くやと長居廿六故の大勢後とたまを強引自  
在方と候とく七月日清合のあひハ千餘騎長門國一と引くゆく故甲に  
まはをんく二千餘騎あくゆ瓜進くは耐ともあひハ千餘騎あま下とたをま  
登固城々良連徒のてく軍と入まはぬとけははこを官軍大勢まを攻りこと  
聞置くく一足も遅く引くはあうりるんくくるまとも打捨く又子日後も  
離れ我馬の踏殺まは去ハ乃もあはる合に進徒らとく前瓜とくあくもあり  
も負死人其救と知くは長門國梅田まは其乃十里がる一軍もせだ一足も踏止  
らく遠くは落着くるる今知くと千餘騎と同一が二千騎まは是とくうり  
それとも病津のゆきとく一まは引くとく故くは宋徒の者ハ一人も討まは梅田







ん知はじぬ官軍にも敵中にも敵も味方もいん空ひば双方戦と止と  
軍の中と寝ひんたるに敵中にも旗と上丈高ひくひりたるにこれに  
より敵中へ後攻のあり格向らまざる勢の中先攻の國人多く良新ぬ秀  
はくひ今日下陣の候も若くは今日の軍も奪んぬ抜草とく只今もこれ  
系とくは敵中のくくも是所出有く我々が別後ゆと所先とく後攻の  
格後と立居ると候ぐもあつた向く向く向く上ま官軍も実ぞと意  
ゆくとく敵中も有る瓜ん適中とそそ奇多し一人も敵中へ入也と  
く先陣の兵千三百餘騎まくはぞ多うたる大肉女の兵も態よく痛  
も我をばを矢かく射さむと敵の方へ引くる敵中ゆいまはるくあま  
く味方付ぎるとく二の園を用く八百餘騎居るべくおくお散るに  
たり大肉女の兵も多くの敵味方と出援く八百餘騎おまると念あく  
中ゆと入るる候くは種は其日もやまうとく大肉女も本居同輝は  
前二ノ五十四

は合のたね草軍困情々良連と中と先治々大肉のまひびく居る  
を滅の候は秀勢々々良新ゆとくおぬくもた対面く九列のやうと向  
や治小賢男はくをさうたる根はゆとやうかうたる舟本も軍中  
見と向々まは治勝立事とく色は今なる秀勢と九列へ渡るは南園とくま  
ぬとくは敵の後攻のあり軍勢二系騎や々宰府と打まはるは後陣  
の勢と信はんぬ下はの優は相攻をく相討はくはくは日け敵は着  
敵はまはるは敵大軍は後まままはくは定敵おはるべくまはるは  
てよりこの陣ゆとくはばも敵は敗はりゆとまはるは南園の園は  
まはるは陣の候は敵とくはせ勢功と代り濃るは秀勢の更とまはる  
又宗秀先陣とくは格のむとくあかん存らひは海とまはるは  
運まはるは今日の合戦もまはるはむまはるは志気然止はくは秀勢は敵  
と松平は秀勢とくは甲斐もはるは定く敵は秀勢の後攻はくは病



